

第Ⅲ部 自動詞的表現の諸相

第4章 「変化」を表さないナル

第5章 ナツテイルによる単純状態の叙述

第Ⅲ部は自動詞のナルに焦点をあて、その多様な意味の広がり进行を明らかにする。日本語は自動詞的表現への指向が強いという点で、しばしばナル的な言語であると指摘される。自動詞ナルは数ある自動詞の中でも特に、「変化」の過程やその結果の状態のありかたなどに関する特定化がなされていないために、他の語彙項目にはみられない多様な意味の広がりが見られる。

本論は特に、一見したところ「変化」の意味を持たないかのようにみえるナルの用法に注目する。ナルの基本的な意味が我々にとって最も身近な現実世界から他のさまざまな領域に拡張することによって、ナルの豊かな意味領域が築かれていることが明らかにされる。

第4章 「変化」を表さないナル⁽¹⁾

1. はじめに

しばしば日本語はナル的な言語であると指摘される⁽²⁾。日本語においてナル的表現への指向が強いということは、ナルを含む自動詞文の表現領域が相対的に広いということである。これは日本語の性格や特徴を論じる上で非常に示唆的な観点である。

自動詞ナルはその意味の透明度が高い（主体や対象の状態などへの特定化がなされていない）という点で、変化自動詞の代表的な語彙項目である。日本語における自動詞的表現への指向の強さという特徴に加えて、その意味の透明度の高さという要因も重なるため、自動詞ナルは他の語彙項目にはみられないような、意味・用法の広がりを見せている。従って、ナルの意味領域の内部をつぶさに観察するということは、日本語の自動詞的表現の全般を考える上でも有意義であると思われる。しかし、ナルがその意味領域の内部にどのようなパリエーションの広がりを持っているかという点についての分析はまだ十分とはいえないのが現状である。

本章は自動詞ナルの「非変化」の用法のを取りあげる。ナルは普通は主体の何らかの「変化」のプロセスを述べる語彙項目として理解されるものであるが、実際にはコピュラの文と置き換えても大きな意味の違いの感じられない「非変化」の用法も多く見受けられる。「変化」と「非変化」という矛盾するかにもみえるナルの多義性をどのようにとらえれば最も自然な理解を得ることができるのだろうか。また、このようなナルの表現の成立条件と特徴とはどのようなものだろう

か。本章はこのような問題について考えていく。

2. 問題とする現象

本章は具体的には次の(1-4a)のような現象を問題とする。

(1) a 三上の枠組みでは、「かみつく」は他動詞になる。

b 三上の枠組みでは、「かみつく」は他動詞だ。

(2) a このあたりは葛飾区になる。

b このあたりは葛飾区だ。

(3) a お手洗いは階段を上った二階になります。

b お手洗いは階段を上った二階です。

(4) a こちらのお品は一万円になります。

b こちらのお品は一万円です。

上の(1-4a)の各例は、通常「変化」を表すものとして解釈することも可能である一方、コンピュータの「だ」(または「です」)を用いたbの文とほぼ同じ意味の「非変化」の解釈も可能である。例えば(1a)では、仮に三上の文法理論の枠組みに何らかの変更があったとして、「それまでは自動詞とされていたものだったが、分類が他動詞に変わる」という「変化」の局面をとらえたものとして解釈することもできる。しかし、本章が特に問題としたいのはそのような解釈ではなく、「他動詞だ」と言うのとあまり大きな違いが感じられない「非変化」の解釈の方である。(2a)も、仮に東京都の行政区画に何らかの変更があったとして、「それまでは別の区に入っていた場所の帰属先が葛飾区に変わる」という「変化」の局

面をとらえたものとして解釈することができる。しかし、本章が問題にしたいのは、「葛飾区だ」と言うのとあまり大きな違いが感じられない「非変化」の解釈の方である。(3a)と(4a)も同様である。

次にみるように、(5a)のような典型的な「変化」を表すと解釈されるナルや(6a)のような尊敬の用法のナルは、コンピュータの文とは大きく意味が異なるという点で上にみたナルとは事情が違うことがわかる。

(5) a グラスが粉々になる。

b グラスが粉々だ。

(6) a 先生がお疲れになる。

b 先生がお疲れだ。

ただし、本章が問題とする「非変化」のナルの文のすべてが単純にコンピュータの文に置き換えられるわけではない。(7)は主語「被害者」と述語「殺害されたこと」が呼応しないためにコンピュータの文が不適格である。(8)は文の意味としては(7)とほぼ同じであるが、主語と述語が呼応しているため、コンピュータの文も適格である。

(7) 複数の目撃者の証言を総合すると、被害者は午後2時から3時の間に殺害されたこと〔になる/*だ〕。

(8) 複数の目撃者の証言を総合すると、被害者の殺害された時間は午後2時から3時の間〔になる/だ〕。

冒頭に掲げた(1-4a)のような「非変化」のナルの文の特徴や成立条件とはどのようなものだろうか。ナルという形式においてこのような用法が可能であるのは

なぜなのだろうか。また、「変化」と「非変化」という矛盾するかにみえる用法を兼ね備える自動詞ナルの多義性について、どのように考えれば最も自然な理解を得ることができるのだろうか。

3. 先行研究と本論の立場

3.1. 先行研究

本章が問題にする「非変化」のナルを分析した先行研究はあまり多くはないが、対照研究という形で考察を加えたものとして、コモンワニック・沢田(1993)をあげることができる⁽⁹⁾。この研究は2種類あるタイ語のコピュラの異同を認知語用論の観点から考察し、日本語の表現形式との対応関係を調べたものである。以下にこの研究の要点と問題点を本論との関連の深い部分を中心にみていく。

コモンワニック・沢田(1993)は、「状態変化を表さず、『AハBダ』に言い換えることができる『AハBニナル』」(p.107)を「準名詞述語文」と呼び、これを一種の名詞述語文とみなすことを提案している。本章の冒頭の(1-4a)もコモンワニック・沢田(1993)の定義に従うならば、「準名詞述語文」であろう。そしてこの種のナルは、「‘状態変化’という実質的な意味を表す本動詞ではなく、単に『A』と『B』を“連結する”文法的機能を果たす動詞として振る舞っている」(p.107)としている。また、次のような例をあげた上で「準名詞述語文」はテンスの分化がなく否定形式も用いにくいとして、ムード形式としての資格があると主張している。

(9)a 二階はレストランになります。(=です)

b 二階はレストランになりました。(≠でした)

c 二階はレストランにはなりません。(≠ではありません)

(10)a 春男は太郎のいところになります。(=です)

b 春男は太郎のいところになりました。(≠でした)

c 春男は太郎のいところにはなりません。(≠ではありません)

上の(9)と(10)の例文はすべてコモンワニック・沢田(1993)からの引用である⁽⁴⁾。(9b)(10b)の過去の文と(9c)(10c)の否定の文は、いずれも非文ではないものの通常の「変化」の解釈しかできないという点で、「準名詞述語文」は過去と否定の形式になじまないと判断している。

以上は本章との関連の深い部分についてまとめたものであるが、以下、本論の立場からいくつかの問題点を指摘したい。まず第一の問題点は、「非変化」のナル(コモンワニック・沢田(1993)のいう「準名詞述語文」)の一部のものは否定の形式にもなじむという点で言語事実と矛盾するという点である。

(11)a 春男は太郎のいところになります。(コモンワニック・沢田(1993)より)

b (春男の父と太郎の父は実の兄弟ではないので)

春男は太郎のいところにはなりません。

(12)a 君達は山田先生の孫弟子になる。

b (私は山田先生の弟子ではないので)

君達は山田先生の孫弟子にはなりません。

(11a)はコモンワニック・沢田(1993)からの引用であるが、(11b)(12b)の否定の文はともにごく自然なものである。このように言語事実の問題として、この種のナ

ルの文の中には明らかに否定の形式にもなじむものがある。過去や否定の形式になじまないということがムード形式として認定するための十分条件になるかという点に関しても議論の余地はあろうが、いずれにしても単に「ムード形式」とするだけでは説明できないものがあることは確かである。

第二の問題点として、成立条件に関して例えば次のような例がなぜ成立しないか（あるいはなぜ不自然か）という点を説明できないことがあげられる。

(13) (年収が一億円というから)

- a 彼は税務署の指定する高額所得者になる。
- b ?彼は裕福な男になる。
- c ?彼は幸福な男になる。

(13a)がごく自然で座りのよいものであるのに対して、(13b)と(13c)はかなり自然さの度合いが落ちる。従って、本章はこのような点を説明しなければならないと考える。

最後に第三の問題点として、コモンワニック・沢田(1993)が「準名詞述語文」が実質的な意味を表す本動詞ではなく、文法的な機能を果たすコピュラであるとしている点について考えたい。コモンワニック・沢田(1993)がこの種のナルをコピュラの種類としてみなす根拠としては、これらがタイ語のコピュラの文と対応することと、「変化」の意味を解釈しにくいことがあげられる。対照言語学的観点からこのような見方をするのは非常に興味深いが、個別言語としての日本語をみる立場から述べるならば、タイ語のコピュラ文と対応するということが自体はそれがコピュラの種類であるとするための十分な根拠にはならないように思われる。また、実質的な意味を表さないとする点も、「変化の意味がない」とするだけでは根拠としては消極的である。後述するように、本論は「非変化」のナル(の少

なくとも一部)は実質的な意味のある本動詞であると考える。

以上のような問題点をふまえた上で考察を進めていきたい。

3.2 本論の立場

ここでは「非変化」のナルを分析するにあたって、本章の立場を明らかにしておきたい。本章は「非変化」のナルをその振る舞いの違いに応じて二つの異なるタイプに分ける必要があると考える。二つのタイプとは以下のようなものである。

(A) 「計算的推論」のナル：否定の形式になじむ。丁寧体の形式を伴う必要がない。冒頭の(1a)と(2a)もこのタイプである⁽⁶⁾。

(14)a 彼は66年の早生まれなので、私と同じ学年になる。

b 彼は66年の早生まれなので、私と同じ学年にはならない。

(15)a 三上の枠組みでは、「かみつく」は他動詞になる。

b 三上の枠組みでは、「かみつく」は他動詞にはならない。

(16)a このあたりは葛飾区になる。

b このあたりは葛飾区にはならない。

(B) 「对人的行為」のナル：否定と過去の形式になじまない。丁寧体の形式を伴わないと不自然である。聞き手に対してごく丁寧な態度で述べる際に使われる。冒頭の(3a)と(4a)もこのタイプである。

(17)a こちらはお手洗いになります。

b *こちらはお手洗いにはなりません。

c *こちらはお手洗いになりました。

d ?ここはお手洗いになる。（「お手洗いだ」という意味で）

(18)a このお品は一万円になります。

b *このお品は一万円にならないです。

c *このお品は一万円になりました。

d ?この品は一万円になる。（「一万円だ」という意味で）

(A) (B) の両タイプは、同じ形式を使っている以上は何らかの共通性があると考えるのが自然であろう。しかし、両タイプの区分には振る舞いが異なるという点で記述的妥当性が認められる。(B) タイプは丁寧体の形式を伴わないと不自然であることからわかるように、対人的機能のレベルの要因が深く関与しているため、成立条件等を(A) タイプとは区別して論じる必要がある。

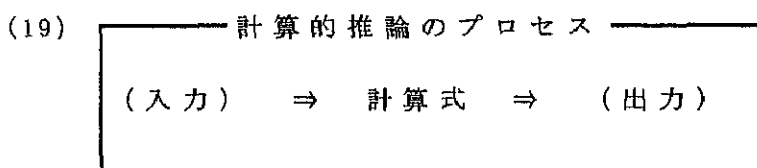
本章では、次の第4節において(A) タイプの計算的推論のナルを、第5節において(B) タイプの対人的行為のナルを取りあげて考察する。

4. 計算的推論のナル

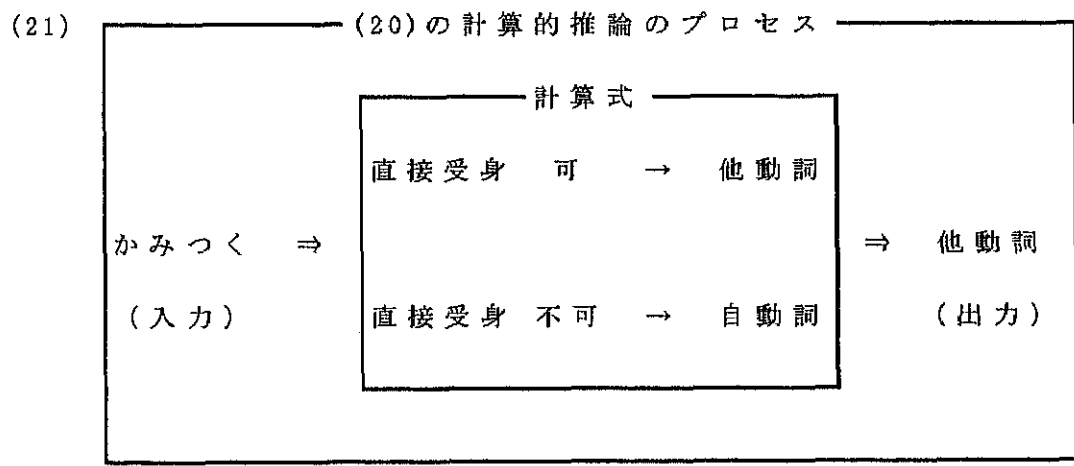
4.1. 計算的推論のあらまし

本節では前節で述べたように、(A) タイプの「非変化」のナル（否定の形式になじむタイプ）の特徴について考える。なお、(B) タイプのナルの文が常に丁寧体の形式を伴うのに対し、このタイプでは丁寧体の形式はあってもなくても良い。以下では両タイプの混同を避けるため、(A) タイプに関しては丁寧体の形式を伴わない用例のみをあげることにする。

本章はこのタイプのナルに、「計算的推論」と呼ぶべきプロセスが関与していることを明らかにする。計算的推論とは、何らかのルールや基準（これを「計算式」と呼ぶことにする）を認めた上で客観的に推論した結果、必然的に得られた結論に至るプロセスである。計算的推論のプロセスを具体例をまじえて図式的に示すならば以下のようなになる。



- (20) a 三上の枠組みでは、「かみつく」は他動詞になる。
 b 三上の枠組みでは、「かみつく」は自動詞にはならない。



(20)の例では、「直接受身を成立させる動詞は他動詞、成立させない動詞は自動詞」という基準（計算式）を認め、これに則って推論した結果、「他動詞である（自動詞ではない）」という必然的な結論に至るプロセスを述べている。つまり、このタイプのナルは我々が身をおく現実世界における事象について述べたもので

はなく、推論の動的なプロセス（これを「推論世界」と呼ぶことにする）を叙述するものであると考えられる。

以上が計算的推論のプロセスのあらましであるが、ここまでの議論からも予想されるように、客観的な計算過程と計算式を想定しにくい場合はこの種の表現は成り立ちにくい。逆に言えば、客観的な計算過程と計算式を解釈しやすい場合は成り立ちやすい。また、当該の計算式（ルールや基準）に従えば誰が計算（推論）しても同じ結論になるようなものでなければならない。更に具体例を観察してみよう。

(22) (年収が一億円というから)

- a 彼は税務署の指定する高額所得者になる。
- b ?彼は裕福な男になる。
- c ?彼は幸福な男になる。

(23)a このあたりは葛飾区になる。

- b ?このあたりはとてもいい所になる。

(24) (ブラジル生まれなので)

- a 彼はブラジル国籍になる。
- b *彼は陽気な男になる。

(25) (いつもラケットをもって登校しているので)

- *あの人はずっとテニス部員になる。

(22a)は非常に座りのよい自然な文であるが、これは「税務署の指定する」というところから、背後に客観的な計算式があることを我々が容易に解釈することができることによる。(22b)と(22c)はやや不自然なものであるが、これらは何らかの文脈の支えのない限り、何を基準として推論しているのかがわからない。この点

が座りの悪さの原因であろう。(23)も同様で、(23a)は東京都の行政区画という客観的な計算式の存在を容易に解釈できる。それに対して、(22b)はこれだけでは何が判断の基準なのかがわからないのである。また、(24b)であるが、「ブラジル生まれだから陽気な男なのだろう」というような推論は十分にありえるものである。しかし、この場合、何らかの計算式に則った推論とは考えにくい。計算的推論とは何らかの計算式に入力することによって、必然的な結論に至るものであって、これは質的に異なる推論であると考えられる。また、(25)も同様であろう。

以下に示す例はすべて実例である。これらの中には、計算式を想起させるような情報や計算式そのものが言語的に明示されているものもある⁽⁶⁾。

- (26) 好調の桜軍団にとって、抑えるべき最大のポイントはFWマグロンになる。(サ：18)
- (27) 隠喩的なものと換喩的なものという分類でいえば、弁証法は換喩的な言語の論理であるということになる。(術：69)
- (28) 一定の個人がこの頂点の位置を占めているということは、その集団の現存成員のうちで、その集団への参加がもっとも早かった一人であるということになる。(タテ：149)
- (29) だが、日本の自衛隊は全員が志願兵であるはずだ。その意味では全員が職業としての軍人を選んだプロということになる。(地：34)
- (30) だが、そんなものが”ドロップ・アウト”なら、中・高卒労働者の過半はドロップ・アウト人間になってしまう。(地：206)
- (31) その仕事で食っていけるかどうかがプロとアマの差だとするなら、アングラの俳優はほとんどがアマチュアということになってしまう。(地：74)
- (32) エントロピーの法則、つまり熱力学の第二法則——エネルギーは一つ

の方向のみに、すなわち使用可能なものから使用不可能なものへ、秩序化されたものから無秩序の方向へと変化する——によって、不可逆的な無秩序の増大が物理的に運命づけられているため、閉鎖系の中で永久運動はありえないということになるわけだ。（術：31）

(29)から(32)の例文の下線部は計算式を想起させる情報もしくは計算式であると考えられる。例えば、(31)では「その仕事で食っていければプロ、食っていなければアマ」という計算式を認めた上で、それに「アングラの俳優」を入力した結果、ほとんどのアングラの俳優がその仕事では食っていけないので、「アマチュアである」との結論に至っている。また、(32)の下線部「エントロピーの法則、つまり熱力学の第二法則」とは、計算式に与えられた名称である。この計算式に則って推論した結果、「閉鎖系の中で永久運動はありえない」という結論に至ることを述べている。

ここまでで、(A)タイプの「非変化」のナルが客観的に得られる結論を述べるものであることをみてきたが、当然ながら、客観的な叙述ではあっても計算式や推論（計算）過程を想定できない場合は、次にみるように不適格である。

(33) *私は山本太郎になる。

(34) *これは鉛筆になる。

さて、ここ(4.1.)での議論を次のようにまとめておこう。

(35) (A)タイプの「非変化」のナルの特徴：

否定の形式ともなじむ「非変化」のナルの表現は、計算的推論と呼ぶべきプロセスが関与している。計算的推論とは、何らかのルールや基準を認めた上でそれに従って客観的に推論した結果、必然的に得られた結論

を示すものである。これらの表現は、現実世界における事象ではなく、推論の動的プロセス（推論世界）のあり方を叙述するものである。

4.2. 計算的推論の背景

ここまで、計算的推論のプロセスの関与についてみた。本節では「変化」のナルと「計算的推論」のナルの関係、ナルという形式においてこのような用法が可能であることの背景などについて考える。

4.2.1. ナルの多義性について

自動詞ナルは、普通は主体の状態の「変化」を表すものとして理解される語彙項目である。しかし、基本的な「変化」の用法の他に「非変化」の用法もあるというのは、矛盾しているかのようにもみえる。「変化」のナルと「非変化」（計算的推論）のナルが同音異義語（つまり、同じ形式をしているのがまったくの偶然である）であるとは考えにくい。とすると、我々はこれらの異なる意味を一つのカテゴリーとしてとらえているとみなすべきである。この点に関して、どのようにとらえるのが最も自然な理解につながるのだろうか。

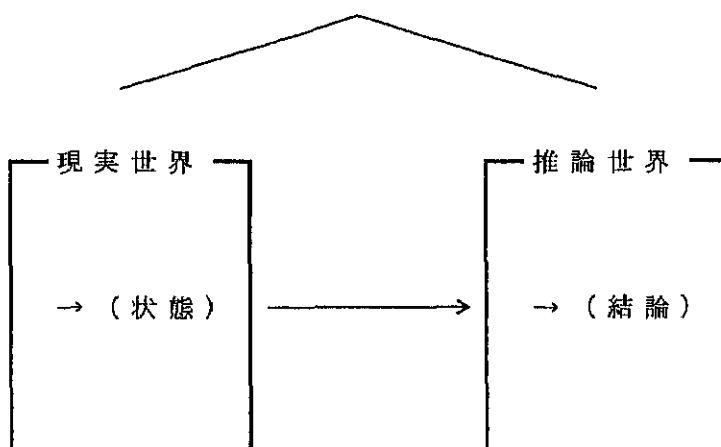
まず、本章のこれまでの議論から、「変化」のナルも「計算的推論」のナルも「ある結果への到達」を表している点で共通していることがわかる。「変化」のナルは、我々が身をおく現実世界において、何らかの状態への到達の局面を述べるものである。これに対し「計算的推論」のナルは、推論世界において何らかの結論へ到達する局面を述べるものである。つまり、「ある結果への到達」という共通する意味が現実世界と推論世界という異なるレベルに適用されることによって、多義性が生じているのである。

両タイプのナルの共通性をこのようにとらえることによって、ナルの多義性を最も自然な形で理解することができるだろう。つまり本論の立場では、「変化」のナルも「計算的推論」のナルも動的なプロセスを叙述する（つまり実質的意味を有する）本動詞である。冒頭で本章が問題とする「非変化」（計算的推論）のナルは、コンピュータの文と大きな意味の違いが感じられないということ述べた。しかし、これは「計算的推論」のナルがコンピュータの文と同じように状態を意味するというのではない。「計算的推論」のナルは推論の動的プロセスを叙述するものであって、現実世界における動きについては何も述べていない。この点がコンピュータの文と意味が近く感じられる原因であろう。「計算的推論」のナルを述語とする文自体は属性を叙述するものとして解釈できる場合が多い。しかしながら、動詞の意味自体が状態を表すというわけではないのである。

ナルの多義性に関しては先行研究におけるように、一方が実質的な意味をもたない文法的な機能を果たすコンピュータであるとの見方もある。しかし、このような立場を主張するのならば、同一の語彙項目が意味的にも文法的にもかなり性格の違うタイプを有していると考えることに対する十分に積極的な根拠を示した上で、自然な説明を与える必要があるはずである。

4.2.2. 「変化」のナルと「計算的推論」のナルの関係

本章は、現実世界における動きを叙述する「変化」のナルこそが基本的な用法で、推論世界を叙述する「計算的推論」のナルは基本的用法からの拡張の結果であると考え⁽¹⁾。この両者の関係は次のように示すことができるだろう。



つまり、両者は「ある結果への到達」という意味を共有しつつ、現実世界を叙述する用法を基本とし、そこから推論世界を叙述する用法の方向に意味拡張がなされているものと考えられる⁽⁹⁾。これは我々の素朴な直感と合致するものであろうが、この見方（現実世界の叙述を基本とする見方）を支える根拠として次のような点をあげることができる。

まず第一に、ナルは推論世界を叙述する場合に成立上の制約があるという点である⁽⁹⁾。ナルが現実世界における何らかの状態への到達を叙述するのに、特に制約があるわけではない。しかし、推論世界を叙述場合に「計算的推論」のプロセスが関与していないといけない点は既にみたとおりである。

第二に、例えば「3時になる」のような主語も修飾語句もなにもない文を文脈的情報や言語外の知識のないところで我々がみた場合は、現実世界における事象の叙述ととるのが優先的な解釈であるという点である。つまりこの文は特別な条件のないところでは、「現実世界における時間が3時の地点に到達する」と解釈されるのが普通である。「（東京は夜の11時だからパリは）3時になる」のような推論世界の叙述として解釈されることはまずないだろう。つまり、推論世界に関する叙述としての解釈は文脈的情報や言語外の知識に大きく依存しているので

ある⁽¹⁰⁾。

本論は「変化」のナルと「計算的推論」のナルの関係を(36)に示す形でとらえるわけであるが、この意味拡張は類似性の連想に基づいて現実世界から推論世界へとなされたものであると考える。つまり、ある領域のことがらを類似性の連想に基づいて異なる領域にたとえて理解しているという点で、メタファーによる意味拡張の結果と考えてよいだろう⁽¹¹⁾。現実世界から推論世界への拡張を動機づけるものは、「ある結果への到達」という類似性であると考えられるのである⁽¹²⁾。

4.2.3. ナルの意味と計算的推論

それでは最後に、なぜナルという形式において、必然的な結論を導く「計算的推論」の用法が可能なのであろうか。

この種のナルが推論の動的プロセスを述べる点は既に述べたとおりである。動的プロセス（つまり非状態）を叙述するには、大きく分けてスル的表現を用いる方法とナル的表現を用いる方法とがある。ナル的表現とは、ある結果に到達する局面に主たる関心がある表現であり、その結果に至らしめた存在やそのプロセスに対しては関心の薄い表現である。これはスル的表現が動作主などを主語の位置において明示するのとは対照的である。そして、この点が推論主体（計算主体）の存在を背景化することにつながる。計算的推論とは、ある計算式に則れば誰が推論しても同じ結論にたどりつく性質のものであるため、推論主体が前景化してしまっては都合が悪いはずである。つまり、当該の結論に意図的に至らしめたと解釈される存在は示さない方がよい。そして、推論主体の背景化が当事者の意図を越えたレベルでのことがらという意味合いを生じさせ、必然的で客観性の高い結論を導くのである⁽¹³⁾。

このように、自動詞ナルという形式において「計算的推論」の用法が可能であ

るのは、ナルの基本的な語義と深く関係しているのである。

4.3. まとめ

第4節は自動詞ナルの計算的推論の用法（否定の形式になじむタイプ）について考察した。ここでの議論の要点は以下のようにまとめることができる。

- a) 「非変化」の解釈が可能な自動詞ナルの用法の一部には、「計算的推論」（何らかのルールや基準に従った客観的な推論）と呼ぶべきプロセスが関与している。
- b) 「変化」のナルの用法が現実世界における動的事象のプロセスを叙述するのに対し、計算的推論の用法のナルは推論の動的プロセス（推論世界）を叙述するものである。
- c) 自動詞ナルは「変化」と「非変化」という矛盾するかにみえる用法を兼ね備えるが、両用法は「ある結果への到達」という共通の意味を有している。
- d) 「計算的推論」のナルは、現実世界の「変化」のナルとの類似性の連想に基づく意味拡張（メタファー）の結果であると考えられる。
- e) 推論の動的プロセスの叙述にナル表現を使用することが当事者の意図を越えたレベルでのことがらという意味合いを生じさせ、計算的推論の用法を可能にしている。

5. 对人的行為のナル

第5節では否定の形式とは決してなじまない（B）タイプの「非変化」のナル

の文について、その特徴などについて考察する。

5.1. 対人的行為のナルの語用論的要因

本節が中心的に取り上げる対人的行為のナルは丁寧体の形式を伴わないと成り立たないという点からも予想されるように、語用論のレベルの要因によってその成立が左右される。本節では、この点に関し三つの要因を指摘する。

5.1.1. 聞き手に対する関与性

まず対人的行為のナルの語用論的要因の第一点として、対人的行為のナルの文は聞き手に関与する事柄でないとならないという点を指摘したい。例をみてみよう。

(37) (何の係をやっているのかと問われて)

私はレクレーション係 {?になります / です}。

(38) (事務員が教員に対して記念式典での役割分担を告げる場合)

先生の今日のご担当はA会場の受付係 {になります / です}。

(37)の例文は特別な文脈を想定しない限り、落ち着きの悪さは拭いきれない。このような場合は「になります」よりもむしろ「です」を使った方が適切である。それでは、「～係になります」という発話が適切に使用される状況とは具体的にどのようなものだろうか。(38)は同じ「～係になります」と言う発話がまったく自然である。この例では聞き手である教員にとって深く関与する事柄が述べられている点が(37)と異なるところである。(37)は特別な文脈を読み込まなければ、話

し手に関与する事柄を述べているに過ぎない。

更に、次の例にみるように、話し手でも聞き手でもない第三者に関与する事柄を述べる場合もやはりやや不自然である。

(39) (レストランの店長と店員の会話)

店長：「3番テーブルのお客様の注文、何だっけ？」

店員：「日替わりのAセット{??になります/です}。」

(39)の店員の発話は話し手である店員と聞き手である店長のどちらかに特に関与が強いものでもない。しかし、これと同じ「日替わりのAセットになります」という発話は(40)のような聞き手に関与する事柄であれば非常に落ち着いたのよいものとなることがわかる。

(40) (レストランの店員の客に対する発話)

お待たせいたしました。日替わりのAセット{になります/です}。

5.1.2. 話者の側に責任のある事柄を述べる状況

次に对人的行為のナルの語義豚的要因の第二点として、この種のナルの文は話者の側に責任のあることを述べる状況で使われるという点をあげたい。ただし後述するように、話者の態度としては必ずしも己の責任を積極的に明確にしようとしているものとは思われない。ここで明らかにしたいことは、客観的な状況としては話者の側に責任のある事柄であるという点である。具体例を観察したい。

(41)a (新幹線に乗り合わせた客同士の会話)

乗客 A : 「食堂車はどこでしょうかね？」

乗客 B : 「食堂車は隣の車両 { ?? になります / です } 。」

b (新幹線の乗務員と乗客の会話)

乗客 : 「食堂車はどこでしょうかね？」

乗務員 : 「食堂車は隣の車両 { になります / です } 。」

(42)a (レストランで食事をしている客同士の会話)

客 A : 「ここのランチセットはいくらですか？」

客 B : 「900円 { ?? になります / です } 。」

b (レストランの客と店員の会話)

客 : 「ここのランチセットはいくらですか？」

店員 : 「900円 { になります / です } 。」

(41a)と(41b)の対比に注目しよう。(41a)は乗客どうしの会話であるため、述べられている事柄は特にどちらの側に責任があるわけでもない。このような状況の下では対人的行為のナルの使用は不適切である。これに対し(41b)では第二文の発話者である乗務員の側に責任のあることが述べられている。このような状況では対人的行為のナルの使用は適切である。また、(42a)と(42b)の対比もまったく同様である。

このように、対人的行為のナルの文は話者の側に責任のあることを述べる状況で使われるということがわかる。

5.1.3. 話者のアピールする態度

第三点として、対人的行為のナルの文は聞き手にとっての都合の良さを積極的にアピールする態度で述べる文脈では使いにくいという点を指摘したい。例をみ

てみたい。

(43) (合否の結果の問い合わせに対して)

- a 残念ですが山田さんは不合格 {になります/です}。
- b おめでとうございます。山田さんは合格 {??になります/です}。

(44) (客に「代金は4000円か?」と聞かれたのに対して店員が答えて)

- a 申し訳ございませんが、4500円 {になります/です/でございます}。
- b いいえ、たったの3000円 {??になります/です/でございます}。
- c いいえ、3000円 {になります/です/でございます}。

(43a)は対人的行為のナルが適切に使用される例であるが、「残念ですが」という表現からわかるように、決して聞き手にとっての都合の良さをアピールできるような状況ではない。他方、(43b)は「おめでとうございます」という表現からわかるように、話者が積極的にアピールする態度をとっている。このような場合は対人的行為のナルの使用は不適切である。また、(44a)と(44b)の対比も同様で、(44b)のように「たったの」という言い方で聞き手にとっての都合の良さ(この場合は値段が安いということ)を積極的にアピールしている状況では対人的行為のナルの使用は不適切である。

ただしここで問題にしているのは、事実としての都合の善し悪しではなく、話者の積極的にアピールする態度の有無である。(44c)は(44b)と同様に、聞き手の予想よりも値段が安いという都合の良いことを述べている。しかし、(44b)における「たったの」のような話者が積極的にアピールする態度をとっていることを示す表現があるわけではない。このような場合は対人的行為のナルの使用も不適切ではないことがわかる。

5.1.4. まとめ

さて、対人的行為のナルの文法的特徴とその成立に関わる語用論的要因とを第3節での議論も含めて次のようにまとめておこう（文法的特徴に関する例文は(17-18)にみた通りである）。

(45) 対人的行為のナルの文法的特徴

- a 非丁寧形になじまない。
- b 否定形になじまない。
- c 過去形になじまない。

(46) 対人的行為のナルの語用論的要因

- a 聞き手に関与する事柄を述べる場合に成り立つ。
- b 話者の側に責任のあることを述べる場合に成り立つ。
- c 聞き手にとっての都合の良さを積極的にアピールする文脈では使いにくい。

5.2. 対人的行為のナルの本質と背景

前節までの議論で、対人的行為のナルの文法的特徴とその成立を支える語用論的要因が明らかにされた。本節では、より本質的にこの種のナルがどのような性格をもっているのか、ナルという形式でこのような用法が可能なのは何故なのかといった点について考えていきたい。

5.2.1. 対人的行為のナルの本質――その意味機能と発話機能――

自動詞ナルは最も基本的には現実世界における主体の変化を述べるものであるが、本論のいう対人的行為のナルは現実世界におけるプロセスを述べるものではなく、話し手による発話行為のあり方に関わるものであると考える。本論はこの種のナルの意味機能と発話機能を次のように捉える。

(47) 対人的行為のナルの意味機能

話し手による聞き手に対する「報告（もしくは陳述）」の発話行為の意図性を排除する。つまり、その発話行為者の存在の背景化の機能を發揮する。

(48) 対人的行為のナルの文の発話機能

聞き手に対する発話を丁寧なもの（柔らかいもの）にする。これは上述の意味機能により発話の直接性が軽減されることによってもたらされる。

この点を具体的な例文に基づいて考えてみよう。

(49) 残念ですが、山田さんは不合格になります。

(49)は話し手が聞き手である「山田さん」に対して、報告(Reporting)もしくは陳述(Stating)と呼ぶべき発話行為を遂行している(14)。本論の考えでは、(49)におけるナルの意味機能は、「山田さん」に対する発話行為の意図性を排除すること、すなわち発話行為者（すなわち話者）の存在を背景化することである。更に、この文の発話機能は、発話行為者の存在の背景化によりもたらされる効果から発話の直接性が軽減され、聞き手「山田さん」に対する発話が丁寧で柔らかいものに

することである。

本論は対人的行為のナルの本質的な性格をこのように捉えるものである。

5.2.2. 対人的行為のナルの背景

それでは、ここまで議論してきた対人的ナルの文法的特徴、語用論的成立要因、本質的性格の背景について考えてみよう。

5.2.2.1. 文法的諸特徴の背景

対人的行為のナルの文法的諸特徴は(45)にまとめた通りであるが、否定形と過去形になじまない理由を考える必要があるだろう。これらの特徴が要求される理由は、対人的行為のナルの文が発話行為を遂行する文（遂行文）である点に求められる。遂行文とは発話を行うことによって何らかの行為を遂行するものなので、そもそも真偽判断の対象になるものではない。この点が否定形になじまない理由である。また、遂行文とは発話の現場において行為をなすものであり、時制が問題にされる余地はない。これが過去形になじまない理由である。

このように、対人的行為のナルの文法的特徴はその遂行文としての特徴に求められるべきものである。

5.2.2.2. 語用論的諸要因の背景

対人的行為のナルの語用論的諸要因を再確認する意味で、以下にこれを再掲する。

(50) (= (46)) 対人的行為のナルの語用論的要因

- a 聞き手に関与する事柄を述べる場合に成り立つ。
- b 話者の側に責任のあることを述べる場合に成り立つ。
- c 聞き手にとっての都合の良さを積極的にアピールする文脈では使いにくい。

まず、(50a)と(50b)について考えよう。すでにみたように、対人的行為のナルの発話の機能は聞き手に対してごく丁寧に述べるという点にある。この点こそが話者がこの種のナルを使用する動機である。(50a)と(50b)に示された二点は、話者が聞き手に対して丁寧になければならぬようにさせる状況であるといえる。聞き手に関与する事柄を述べ、しかもそれが話者の側に責任のあることを述べるということは、必然的に聞き手に対する配慮が非常に重要なものとならざるを得ない状況に話者が立たされるということを意味する。この点が(50a)と(50b)の語用論的要因が関与する理由である。

次に、(50c)の語用論的要因が関与するのは何故であろうか。この点については、(47)に示した対人的行為のナルの意味機能にその理由が求められる。この種のナルは発話行為者 (= 話者) の存在を背景化する機能を發揮する。話者の背景化という機能と話者が積極的にアピールする態度をとるということは明らかに矛盾する。話者が積極的にアピールする態度をとれないのはこのためである。

5.2.2.3. 本質的性格の背景

(47)において、この種のナルの意味機能が発話行為の意図性を排除すること、すなわち発話者の存在を背景化することにあると述べた。それでは、「意図性の排除」という働きは何に由来するものであろうか。これはナルの表現の特色に求

められる。自動詞ナルは、ある結果に到達する局面に主たる関心があるものであり、その結果に至らしめた存在やプロセスに対しては関心の薄い動詞である。従って、このような性格のナルの表現を有標的に使用することが主体（この場合は発話行為の主体＝話し手）の背景化につながると考えられる。すなわち、発話者の存在の背景化という機能もナルという語彙項目の基本的な語義と深く関わっているのである。

5.2.3. 他の用法との関連

5.2.3.1. 意味拡張の原理

それでは、主体の変化の意味を基本とする自動詞ナルがこのような多様な意味の広がりを獲得する原理とはどのようなものであろうか。本論はこの問題を共時的観点から考えるものであるが、現実世界に関する叙述から発話行為領域への類似性の連想に基づいた意味拡張（すなわちメタファーによる意味拡張）であると考える⁽¹⁶⁾。この場合の類似性とは、主体の背景化という意味機能であると考えられる。既に述べたように、ナルはある結果に到達する局面に主たる関心があるものであり、その結果に至らしめた存在やプロセスに対しては関心の薄い動詞である。従って、ナルを使用することが一種の「和らげ」ともいうべき効果を生じさせることは現実世界を叙述する用法にもみられる場合がある。

(51) 君がそんな態度だから、私だって厳しいことをいうことになるんだよ。

上の例は現実世界におけるプロセスを述べるものであるが、話者はナルを使用することによって発話主体である自分自身を背景化させ、相手との直接的な摩擦を

回避させ、結果として「和らげ」の効果を生じさせていると解釈できる。多岐にわたる用法を有するナルの表現上の効果を考える上で、「主体の背景化」の機能は鍵になる概念であると思われる(16)。

なお、我々の素朴な直感とも合致するものであろうが、本論は現実世界を叙述する用法こそがナルの最も基本的な用法であるとする立場をとる。これを裏づける根拠としては、それ以外の用法（对人的行為や計算的推論）においてより多くの成立上の制約がみられるという点である。つまり、对人的行為や計算的推論の用法においては言語外の知識や文脈的情報等に依存する形で意味の解釈がなされているのである。

5.2.3.2. ナルの意味の適用領域と多義性

しばしば日本語は自動詞的表現の領域が相対的に広いという意味で、ナル的な言語であると指摘される。特に自動詞ナルはその意味の透明度の高さという特徴もあるため、その意味領域の内部に豊かな広がりをもっている。これまでの考察を振り返ると、ナルの意味がどの領域に適用されるかによって、ナルの多義性が生じている事情がわかる。つまり、現実世界に適用される場合は通常の「変化」の用法になるし、推論世界（推論の動的プロセス）や発話行為領域に適用される場合はそれぞれ計算的推論、对人的行為の用法がえられる。

ただし本論の考えでは、ナルの諸用法は相互に排他的関係にあるものではなく、一つの現象が複数の側面を兼ね備える場合もあると考えられる。次の例をみてみよう。

- (52) a 恐れ入りますがこちらのカードの有効期限は一年以内ですので、ご使用期間は昨日までになります。

- b このカードの有効期限は一年以内なので、使用期間は昨日までになる。
- c このカードの有効期限は一年以内なので、使用期間は昨日までということになる。

(53)a こちらはアメリカンコーヒーになります。

b *こちらは（これは）アメリカンコーヒーになる。

c *こちらはアメリカンコーヒーということになります。

(52a)は計算的推論と対人的行為の両方の側面を有していると考えられる。もちろん相手に対してごく丁寧に述べるという特徴もあるが、(52b)や(52c)のように丁寧体の形式を伴わなくても成り立つのは計算的推論としての側面があるからである。また、(52c)にみるように「ということ」という語句の挿入も可能である。本章の注6において指摘したように、計算的推論とは推論の結論を導くものであるためこの種のナルの文には「ということ」が常に挿入可能なのであるが、(52c)はこの文に計算的推論としての側面があることを裏づけるものである。(53a)は対人的行為としての側面しかないものであるが、この例は(53b)にみるように非丁寧体の形式では成り立たず、(53c)にみるように「ということ」の挿入が不可能である。これらの現象は(53a)に計算的推論としての側面がないことを意味している。

このように、ナルの諸用法は相互に排他的関係にあるとはみるべきではないことがわかる。

5.3. まとめ

本節における議論の要点は次のようにまとめることができる。

- a) 自動詞ナルの「非変化」の用法の中の否定形になじまないタイプは聞き手に対する丁寧さと深い関わりがある。
- b) このタイプのナルの文は話者の側に責任がありなおかつ聞き手に関与する事柄を述べる場合に成り立ち、聞き手にとっての都合の良さを積極的にアピールする文脈では使いにくいという語用論的な要因が認められる。
- c) 発話行為領域の事柄に対してナル的表現を有標的に使用することが、聞き手に対する報告（もしくは陳述）の発話行為の意図性の排除（発話行為主体の背景化）の機能につながり、これが聞き手に対する丁寧さ（柔らかさ）をうむ。
- d) 主体の背景化という機能の類似性の連想に基づいて、現実世界から発話行為領域へと意味拡張がなされたものと思われる。

6. おわりに

本章は「非変化」のナルの諸用法について考察した。「非変化」のナルの中に否定の形式になじものとなじまないものがあるという振る舞いの違いに注目し、それに従って分類をほどこして考察した。結果として、それぞれ、ナルの意味が現実世界から他の領域に拡張されることによって多様な意味の広がりがみられることが明らかになった。

冒頭でも述べたように、日本語はナル的表現の勢力範囲が相対的に広いという意味で、しばしばナル的な言語であると指摘される。この点について、これまで議論にのぼっていたのは(54)にみられるような言語間における発想の異なりや、(55)にみられるようなナルの尊敬用法などであった。

(54)a 私たちは結婚することになりました。

b We are getting married.

(55) 先生がお帰りになる。

本論はこれらに加えて、「計算的推論」や「对人的行為」のナルも日本語のナル的言語としての性格を示す一面であると考え。これらの現象も日本語におけるナル的表現への指向の強さを表すものの一つとしてみなすことができるだろう。